

口頭③

+αの情報提供とその先にあるもの ～生活習慣病患者を例に～

若松町店
○隅谷 慎司

【緒論・目的】

疾患や医薬品に関する情報は数多く存在し、患者様によって知りたい情報は様々である。一方で近年、健康長寿の大きな阻害要因となる生活習慣病罹患率の増加が継続的に問題となっている。この生活習慣病は個人が日常生活の中で適度な運動、バランスの取れた食生活などを実践することによって改善し得るものでもある。しかしながら、その運動・食事療法は適正に行われる必要があり、そのためには患者様自身が正確な情報・知識を身に付けることが重要となる。そこで今回、患者様が実際に知りたい・興味のある情報を把握するため、調査・検討を行った。

【方法】

患者様アンケートを実施(7日間 518名)し、患者様が知りたい・興味のある情報について調査した。そのうち、生活習慣病の運動・食事療法に関心のある患者様に対して、リーフレットなどを用いて積極的に生活習慣の改善を提案した。なお、可能な事例に関しては、生活習慣や検査値などを経時的に観察した。また、簡易的な検査値一覧を作成し、患者様自身の現状の把握、それに伴う生活指導の実施を付け加えた。

【結果】

『聞きたい情報のあり・なし』に関しては、生活習慣病の有無では大きな差は見られなかったが、『情報に対する興味のあり・なし』では生活習慣病の有無で大きな差が観察された。また、リーフレットなどを用いた情報の提供後、生活習慣や検査値の改善した例が観察された。

【考察】

生活習慣病に関する情報を提供後、生活習慣や検査値の改善が確認できたことから、リーフレットなどを用いた根拠のある情報提供が有用であるということが明らかとなった。治療に対する相乗的な効果が見込まれ、より良い薬物治療の提供が可能になるものと示唆される。一方で、長期的に経時観察を行った場合に両者の改善が見られない事例には、さらなる対策が必要であると考えられる。今回の取り組みは、生活習慣や検査値の改善だけでなく、患者様からの信頼の獲得・向上、ひいては患者様の服用する薬物の減量につながっていくものと推察される。